

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(56) 平成14年10月1日

古代の官撰史書(2)

『続日本紀』(213/50)

『続日本紀』は『日本書紀』に続く官撰史書で全40巻あり、文武元(697)年～延暦10(791)年までの95年間が編年体で記され、延暦16年に完成しています。藤原継縄、菅野真道、秋篠安人、中科巨都雄らが編さんに携わっています。数人の編さん者の中でも菅野真道と秋篠安人の功績が大きく『続日本紀』という題を決めたのもこの2人であると言われています。

成立の過程は複雑で、全40巻の内、前半の20巻と後半の20巻が別々に編さんされています。天平宝字2(758)年8月から延暦10年までの20巻は藤原継縄らが編さんし、文武元年から天平宝字2年7月までの20巻は、菅野真道らが編さんしました。このことは延暦13年の藤原継縄らの上表文や、延暦16年の菅野真道らの上表文によってわかりますが、古い時代の20巻が後に奏上されています。

写本や版本は『日本書紀』ほど多くはなく、当館では明暦3(1657)年の立野春節による版本全20冊を所蔵しています。この20冊の中に『続日本紀』全40巻が納められていますが、1冊に2巻ずつ入っています。

『続日本紀』は9代にわたる天皇の治世が記されており、その構成はおおよそ以下のとおりになっています。旧稿を再編成する過程で、巻の途中で治世が変わっているところもあります。巻1～巻3は文武天皇紀、巻4～巻6は元明天皇紀、巻7～巻9は元正天皇紀、巻9～巻17は聖武天皇紀、巻17～巻20は孝謙天皇紀、巻21～巻25は淳仁天皇紀、巻25～巻30は称徳天皇紀、巻31～巻36は光仁天皇紀、巻36～巻40は桓武天皇紀です。

『続日本紀』には、日本史の著名なできごとが数多く載っています。元明天皇紀では和銅元(708)年2月に催鑄銭司を置き、同8月に銅銭(和同開珎)を鑄造したことが記されています。また、和銅元年9月には平城京造営が始まり、同3年3月には平城京に遷都したことが記されています。聖武天皇紀は長くて、8巻もあります。天平文化を生み出した天皇であり、天平13(741)年3月24日には国分寺設置の詔が発せられています。孝謙天皇紀では天平勝宝4(752)年4月に、東大寺の廬舎那仏の開眼供養が聖武上皇、孝謙天皇臨席のもと盛大に行われたことが記されています。光仁天皇紀では宝亀9(778)年の遣唐使の帰朝報告や道鏡の伝記などが史実をもとに示されています。

最後の桓武天皇紀ですが、『続日本紀』は桓武天皇の代に完成しているのですから、巻36～巻40はまさに今上天皇の治世について記されていることとなります。六国史の中でも今上天皇紀を記しているのはここだけであり、異例と言えます。平安遷都を成し遂げた桓武天皇の自信のなせるところとも言われていますが、史実を削除してしまったところもあるとも言われています。

戦前の『日本書紀』を中心とする皇国史観の反省から、戦後は史実を中心とする広範で詳細な記述が多い『続日本紀』が、大学の史学科のテキストとして人気が高まった時期もありました。注釈本には江戸期の河村秀根の『続紀集解』、村尾元融の『続日本紀考証』(213/140)などがあります。

【参考文献】

『新訂増補国史大系』

(210.088/4A-3)

『六国史』

(211.8/15)